●毎月第四週は、
松浦武四郎のコレクション
についてご紹介します

週刊 武四郎

第42号
2019年（平成31年）1月23日（水）
発行・松阪市

監修・松浦武四郎記念館

前頭二十九枚目

今、私たちは松浦武四郎さんのことを、〈北海道の名付け親〉と呼んでいますが、実は生前は『古銭蒐集家　松浦武四郎』と、新聞などでは書かれることが多かった……という話はこの連載の三号で書いた通りなのですが、その古銭蒐集家としての新資料がいくつか見つかったのでご披露しましょう。

実は、武四郎記念館には古銭番付が数種所蔵されています。

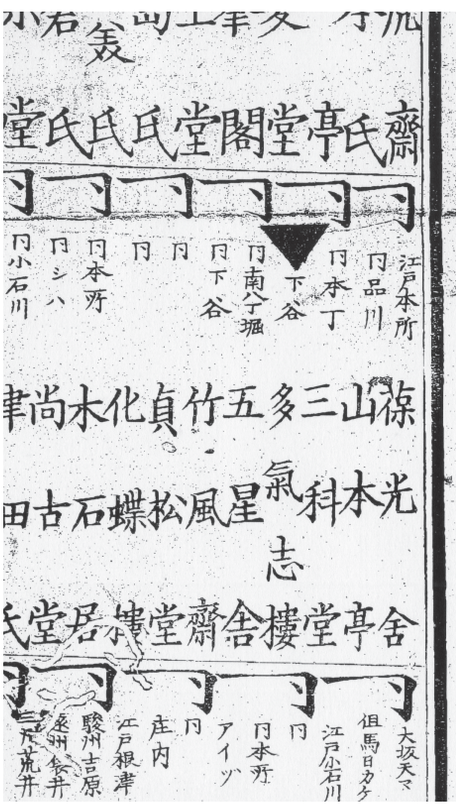
番付？

そうです。今は、番付といえば相撲とか、長者番付くらいしか知られていませんが、江戸の頃は、いろいろなものの番付がありました。古銭番付は、古銭蒐集家をランク付けしたものです。古銭は、知識が豊富でないと楽しめない高尚な趣味で、愛好家のためのガイドブックも多く出版されました。当時、それくらい古銭愛好家というのはたくさんいたのです。その中で、明治十（一八七七）年に大蔵省にコレクションを献納した武四郎さんは、明治年間の古銭番付では、枠外の別格扱いになっています。

このように武四郎記念館にある番付は、すでに蒐集家として名をなしていた明治以降のものばかりだったのですが、つい最近、幕末の頃……慶応元（一八六五）年の古銭番付の中に、若き日の武四郎さんの名があることを、古銭蒐集家の方が発見しました。

〈江戸　下谷　多氣志樓〉という名で、なんと前頭二十九枚目。古銭蒐集家として売り出し中の若き日のコレクター武四郎さんの姿を彷彿させます。

そして昨年、武四郎さんのご子孫から、ご自宅に保管されていた古銭が武四郎記念館に寄贈されました。ご子孫の元には大事に武四郎さんの古銭がまだ残されていたんですね。



▲古銭番付（其角堂コレクション）

このことに、ある古銭愛好家は非常に感銘を受けたと話していました。普通コレクターが亡くなると、残された家族はそのコレクションを処分してしまうことが多いものです。特に古銭は（古くても貨幣であることに変わりはないので）たいていの場合、一番最初に売られてしまうものなのに、それを没後百年以上、幾多の天災や戦争をくぐり抜け守り通してきたとは…！そこにはご子孫の方々の、武四郎さんに対する並々ならぬ思いがあったように思います。

松浦武四郎（1818～1888）
三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地（今の北海道）を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として〈北海道〉のもととなる〈北加伊道〉を含む6案を政府に提案したことから〈北道の名付け親〉と称される。

文・河治和香　装画・りんたろう　編集・細山田正人　デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』（河治和香著）が、小学館より好評発売中！